

「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に・・・」

ヨハネによる福音書 7章37～39節

学問の分野に「社会学」という領域があり、そこで特に 社会やそこに生きる人々の文化的な特質を研究している人たちがいます。そして、その方面で「現代の古典」とも呼ばれるようになった、広く知られた有名な本があります。デイヴィッド・リースマン (David Riesman) というアメリカの学者の著わした本で、そのタイトルを『孤独な群衆 (The Lonely Crowd)』といいます。出版されたのは、第二次大戦後すぐの 1950 年でした。その本が、それから 11 年後の 1961 年に日本語に翻訳され、日本語版として登場。日本も戦後 16 年が経って、経済がいわゆる「成長期」に入った頃で、社会にも様々な変化が現われ始めていました。そして、その頃からしばらくの間、日本の ^{ちまた} 巷でも流行った流行語の一つがほかでもない、この本の題名である「孤独な群衆」という言葉だったのです。そもそもはアメリカの社会が研究の対象でしたから、元々はそこに生きる人々の文化的な特徴や性格が観察され、分析されて、研究されたわけです。ところが、そこで明らかになった事柄は、単にアメリカだけに限られたことではない。戦後の復興期の日本にも同じように見られることなのではないか。人々はそう感じて、『孤独な群衆』という その本のタイトルを、当時の流行語になるほどに口にしたのでした。

リースマンの分析の結果をひと言で言うなら、アメリカの社会には大きく分類して、3つの典型的な型が見られる。一つは、伝統に従って生きようとする「伝統指向」のタイプ。二つ目は、^{みづか} 自らの内なる目標に従って生きようとする「内部指向」のタイプ。そして最後は、外なる人々の期待や好みに敏感に生きようとする「他人指向」のタイプ。これらの3つが典型的なタイプとして見られ、そして、現代はその三つ目である「他人指向」のタイプへと 移行が顕著になりつつある、と そう語るのでした。『孤独な群衆』という 本の題名は、この三つ目の「他人指向」のタイプに^{ちな} 因んで名付けられたものです。つまり、それは要するに、次のようなことを示唆するものとなっています。「私たちは、あちらを見てもこちらを見ても、たくさん人間が群れを成すようにして集まっている。そして、一緒に^{おい} 美味しいものを食べ、楽しいことをし、華やかなものを探し求めては、忙しく立ち動いている。そこには、人の行き交いがあり、賑やかな^{にぎ} 会話もある。しかし その心の中は、自分はほかの人たちにどう見られているのか、どう映っているのか、そのことがいつも気になっていて、実は心配でならない。そうした外なる他の人々の目で自分が縛られていて、自分の生き方がコントロールされている。だから、本当のところは、自分に自信がなくて、寂しくて、そして 独りぼっちで孤独でならない」。本当のところ、実はそうなのではないか、と。もちろん、この本は学的な研究の書ですから、一々の事柄に^よ 良し^あ 悪しの評価を行なうものではありません。がしかし、分析の実際として、私たちは今 群

れをつくって群衆でいるけれど、そのようにして群れてはいるけれども、でもその実は 誰もが孤独な一人ひとりではないのか、「孤独な群衆」の一人ではないのか、との指摘はどこか当たっているように感じられます。たしかに、お国は日本で、年月も出版当時からすでに 70 年以上が経っています。けれども、2024 年の今・この時、この日本においても 事はそれほど変わらないのではないかと。もしかすると、さらにも深まりつつある、どこか寂しく悲しいこの私たちの現実を言い当てているかもしれない、と思わされもします。いかが思われるでしょうか。

実際、自ら命を絶つて 死に赴く人たちも、悲しいことに、春先やクリスマスの前後、そしてまた新年 お正月といった、いわゆる華やかで晴れやかな時にそうすることが多いと言われます。なぜなら、そんな時にこそ、世間はあるに明るくて楽しげなのに、なのに この自分にはいったい何があるってんだ、と 暗く絶望的な思いに襲われるからです。ここでもまた 私たちは、どんなに多くの人に囲まれていようとも、いやむしろ この場合、多くの人々に囲まれているからこそ逆に、なおさら深く独りぼっちなのになにがありません。

ここには どうやら、時代を超えた 私たち人間の本質的な問題が隠されているように思われるのですが、いかがでしょうか。他の人たちと比べてどうこう、ではない。他の人たちがどうあれ、自分にはこれがある。しかも、持ち物の多さや生活の華やかさといった 外側のあれこれではなく、自分自身の内側の確かさ。蜉蝣のような 儚いものではなくて、消えず壊れず、なくならずにいつまでもあり続けるもの。そのような 自分自身の内に息づく確かなものです。それがあれば、群衆から外れてたとえ一人になっても、孤独に絶望することはないのではないかと。それがあれば、周りがどうあれ、底なしの闇に追いやられることもないのではないかと、そう思わされます。

イエス・キリストが 38 節で言われる「生きた水」とは、言葉を換えれば、そうしたものを意味しているのではないのでしょうか。人を真実 生かすもの。この私たちを生かす本当のいのちです。そして、聖書はこう語ろうとしているように思われます。気づいていようがいまいが、このいのちはすべての人を生かすものであり、人は誰もがその根っこのところでその水に渴いている、と。

今月の聖書は、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に」(37) との言葉で始まっています。前述で触れた 群衆が賑やかに集まる様やお正月などの華やかで晴れやかな時と、どこか似ているように感じられます。そのようにして祭りが盛大に祝われている まさにそのただ中で、主イエスが「立ち上がって 大声で言われた」(同) というのです。それは いったい、どんな状況の中でのことだったのでしょうか。その様子を少しく見てみましょう。

この祭りが「仮庵祭」と呼ばれるそれであったことは、同じ 7 章の 2 節に記されているとおりです。ユダヤの 3 大祭の中でも最大のものです。それは、これまでも触れたように、旧約聖書の時代、イスラエルの民が奴隷のエジプトから脱出して 荒れ野を彷徨ったときのことと関係しています。彼らは仮の小屋を造り、そこに寝泊りしながらそうしたのです。その歴史を思い起こすのが仮庵祭で、そのようにして 40 年という放浪の時を主なる神が守り導いてくれたことを感謝するもので

した。さらには、10月の15日ごろに祭りがもたれたことから、これに加えてまた、秋の収穫感謝の意味合いも持っていたといえます。要するに、自分たちの行く末を守り導き、必要なものを与えてくださる主なる神の恵みを感謝する記念の時でした。

祭りの具体的な様子は次のようだったと言われています。祭りは7日間にわたってもたれました。そこでは、「光」と「木の枝・葉」と、そして「水」がその中心的な役割を果たしました。

まず、「光」というのは、何本もの枝の付いた大きな蠟燭の台が幾つも用意され、そこに火が灯されました。その明るさは、エルサレムの家々を照らすほどだったと言われています。エジプトからの旅路を神が火の柱をもって導かれたという記事が旧約聖書の出エジプト記に記されていますが、その導きの光を象徴するものです。

次いで、「木の枝・葉」というのは、旧約聖書に記されている規定に従い、「木の実、なつめやしの葉、茂った木の枝、川柳の枝」(レビ 23:40) を手にして、毎日 神殿に詣でるというものでした。人々はそれらを振り翳しながら 祭壇の周りを行進し、そして、祭壇に壁と屋根とができるように それらを重ねていきました。それは、荒れ野の仮小屋を表わすものでした。

そして最後に、「水」です。「水」は、祭りの間 毎日、祭司が神殿の南側にあったシロアムの池から汲んできました。イエス・キリストが目の不自由な人を癒やされたという(ヨハネ) 9章の初めに出てくる出来事の舞台となった池ですが、水が自然に湧き出ている泉のような池だったと考えられています。「生きた水」というのは 当時、溜まって澱んだ水ではなく、流れているか湧き出しているかして綺麗に澄んだ水を意味しましたから、その点からしても、それは祭りの状況に合うように思われます。いずれにしても、祭司は黄金の桶でその水を汲み、神殿に戻って、そして 祭壇にその水を注いだのでした。それは 再び、イスラエルの民が荒れ野を旅した間、岩からほとぼしり出る水をもって養われ、そして救われたという 旧約の出来事を記念するものであり、いのちの水を象徴するものでした。

仮庵祭はこのようにしてもたれました。それは文字どおり 盛大なもので、祭りの間 中 笛やラッパや合唱が奏でられ、ダンスも踊られたといえます。そして、ここでもまた、聖書の言葉が読まれました。「あなたたちは喜びのうちに 救いの泉から水を汲む」。旧約聖書のイザヤ書の言葉(イザヤ 12:3) です。実際、それは本当に華やかで喜ばしいもので、ユダヤ教の教師たちのこんな言葉も残っているほどです。「この水を汲む喜びを見たことのない者は、喜びの何であるかを ついに知らぬままに終わるであろう」

主イエスが「立ち上がって 大声を上げられた」(37) のは まさに、このようにして祝われていた祭りの最終日、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」だったと、聖書は記しています。祭りの最後の日には 人々の行進がさらにも熱を帯び、祭壇の周囲を7回 回り巡ったと伝えられています。祭りの興奮が最高潮に達しています。そのときです。主イエスが大声を上げられた。叫ばれたのでした。しかも、「立ち上がって」 そうされた。人に何かを教えるとき、ユダヤの教師たちは、座ってそうするのが常でした。これに対し、主イエスは「立ち上がって」、しかも「大声で」叫ばれたのです。尋常ではありません。舞い上がって浮き足立っている祭りの空気を払い除け

るかのような、それに挑むかのような感じさえしないでしょうか。そう、それは確かに、人々の目を覚まそうとするものだったのではないか。そのようにして「大声で」叫ばれたのはまさに、そのためだったのではないか、と思わされます。単なる肉体の渇きを癒やすものではなく、もっと深くてもっと大切な渇きを癒やす水。私たちの魂の奥深くに浸透し、そのいのちを豊かに潤す水。そんな水にこそ飢え渇いて、それを飲むようにと、そのように目を覚まさせ、そのように招かれたのではないのでしょうか。そして、言われます。37 節、38 節、「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て 飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から 生きた水が川となって流れ出るようになる」。ヤコブの井戸かたわの傍らで サマリアの女性に同じように言われた（ヨハネ）4章の言葉を覚えておられるでしょうか。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（ヨハネ 4：14）。イエス・キリストは、今また もう一度、同じ言葉を繰り返されます。

ここで、時代を一気に 現代に引き戻しましょう。引用が芸能人のそれで 少々俗っぽくもあり、気が引けなくもないのですが、矢沢永吉やざわえいきちという 有名なロック歌手を御存じでしょうか。それこそ、人生いろいろ。結構な苦勞を重ねながら、74 歳の今なお 歌い続けておられます。その矢沢さんの言葉が、以前、新聞に掲載されました。こんな言葉です。

僕のぼく生き方を見て、勇気をもたらさと言ってくれる人は多い。現役でがんばり、手痛い目にあっても必ず立ち上がってくる姿がいいって。でも、僕のことを観客席から声援しているだけじゃなくて、みんな 自分の人生を目いっぱい走っていますか。・・・

・・・どんなに有名になっても、いくつものビルを建てることに必死になっても、死後まで持っていくことはできない・・・。自分がかんおけ棺桶に片足入れた時に、「おれの人生悪くなかった」と思って卒業するにはどうすればいいかでしょう。

だれにでも大切なのは、自立することだと思う。・・・

たしかに、宗教や信仰と直接には関係のない、いわゆる一般的・世間的な言葉と言えなくもありません。けれども、人生を、観客としてではなく、自分で目いっぱい走かんおける。棺桶に片足を入れたときに後悔しない生き方をする。さらには、大切なのは自立すること、といった言葉は、誰にも響いて当てはまる、すなわち すべての人に通じる言葉でもあるのではないのでしょうか。問題は、何によってそのように生きるのか。何をもとい基にして、何を源にして自立するのか、ということではないでしょうか。聖書はそれを、イエス・キリストのいのちによって、生ける主イエスの伴いによって、と語ります。

しかし、そうは言われても、私たちの受け止め方や応答の仕方は様々です。実際、かりいお仮庵の祭りに詣もうでていた人々のどれだけが、イエス・キリストのこの招きに答えて、主イエスのもとに赴いたか。

おそらく、そう多くはなかったのではないのでしょうか。祭りの興奮のなか、すなわち 群れ集まった 群衆の興奮のなか、自分自身の内側を見詰めることに遠くなっていた。もしかすると、そうした束の間の賑やかさに気を紛らすことで、心の内の渇きを見ないようにしている人もいたかもしれない。さらには、祭りを遠巻きにし、虚しさをその内に抱えつつ、冷めた冷ややかな目で 祭りを眺めている人。そんな人たちもまた、いたかもしれません。言ってみれば、こうした人々が決して少なくなかったからこそ、イエス・キリストは十字架につけられたと言えなくもないように思われます。しかし、主イエスはそうした人たちをも含めて、叫んで招かれたのでした。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て 飲みなさい」。それは、そのことに気づいていようがまいが、誰もが本当は飢え渇いている。魂の一番深い根っこのところで、自分を本当に生かし、そのいのちを真実豊かにしてくれるものを求めて渇いている。そのことを、主イエスが御存じだったからではないのでしょうか。

そんななか、その渇きに気づいた人はなんと幸いなことでしょうか。そのような方として、一人の御婦人のことを思い出します。30代半ばの御婦人でしたが、御夫婦のことで、また御自分の生き方のことで問題を感じ、考えをめぐらしておられました。それは、軽い、気の持ちようで済むようなものではありませんでした。そして、その解決の糸口を求めて、教会に来られたのでした。小学校入学前の小さな娘さんの手を引いて、バスに乗り、山を越えて、毎週欠かさず 礼拝にやってこられました。と そんなあるとき、こう尋ねられます。「主人がお金をくれないので、献金するお金がないのですが、それでも礼拝に出てよろしいのでしょうか」。お相手がどうやら、良くない人たちと関わっていて、毎日の生活をするにも 苦勞をされていたようです。何かあったら 教会に逃げ込んでいいのでしょうか、と そんな電話を頂いたこともありました。ですから、バス代を出すだけでも精いっぱいだったのです。ですが、この方は、自身の中の深い渇きに気づいていました。その渇きについて、後日、次のように教えてくださいました。「生活のうえで思うようにならないことは、たくさんあります。誰かに頼らなければなりません。でも、心の在り方だけは、精神的な生き方だけは、自分でしっかりと立ちたかった。自分で歩きたかったのです」。こうして、この方は聖書のイエス・キリストに出会われました。主イエスを御自分の生き方の中心に据え、共に生きてくださるという、生ける主イエスのその伴いの約束を信じて歩き始められました。そして、バプテスマの後、決して広いとも言えない御自宅を提供して下さり、近くの方々を招いて家庭集会を開いてくださったのでした。イエス・キリストの伴いによって渇きが満たされ、その生きた水が内から流れ出た人の姿が、そこにありました。

ならば、その「生きた水」は、どこから、どうやって来るのか。そして、どこに、どのように流れ出ていくのでしょうか。「生きた水」のことを指して、聖書は次のように記しています。「イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている “霊”、について言われたのである」(39) と。つまり、「生きた水」とは「霊」のことだと言うのです。私たちの親しんでいる表現で言えば、「聖霊」のことと言えるでしょう。けれどもまた、聖書はそれと同時に、こうも付け加え

ています。「イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていませんからである」(同)。全体を分かりやすく言い直せば、つまりはこんなふうになるでしょうか。「栄光」とは、すでに何回か触れましたが、ヨハネの福音書においては、私たちのために十字架架上に死ぬことを意味しています。ですから、聖書はここで、次のように語っているように思われます。主イエスはまだ、十字架上で御自分を死に渡されておられない。犠牲の死を死んではおられない。そのようにして、御自身を捧げ、そして甦って、神の御許に戻ってはおられない。だから、御自身を信じる者たちのもとに、聖霊としてまだ臨んではおられない、と。しかしながら、それはまた逆に言えばまさに、次のように約束してくださっていることでもあるのではないかと。そう思われます。すなわち、十字架の栄光を経て復活し、神の御許に戻ったら、私は今度は、信じる者たちのもとに聖霊として臨み、そして共に生きる、と。神の霊についてはたしかに、旧約聖書などにも出てはきます。けれども、それらは、聖霊がどのようなものであるかを完全に表わすものではない。それを完全に明らかにするのは、甦ってこの私たちのもとに臨んでくださる復活のイエス・キリスト、そのお方なのだ、と聖書はそう教えているように思われます。であれば、復活の主イエスを聖霊として迎え入れ、その伴いを信じて生きる。それが聖書の語る信仰ということになるのではないのでしょうか。使徒パウロは「ローマの信徒への手紙」において、これを言い換え、次のように述べています。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」(ローマ 8:14)

そのために、この私たちがなすべきこと。それは、観客にならないこと、傍観者にならないこと、ではないでしょうか。木崎さと子さんというクリスチャンの作家がおられますが、ある本の解説の中で次のようにおっしゃっておられました。「キリスト教も、というより、イエスも“論”ではない〔「説明」ではないのである〕。生きた人格をもつ神である。・・・イエスとの人格の交わりだが・・・真の魂の交わりとは、相手と自分が、生〔きること〕の〔その〕場〔で〕・・・融け合うことであろう」。聖書の信仰に、他人事のような、評論家のような信仰はないのでしょうか。信仰は単なる文化でもなければ、教養でもないからです。それは、日々の生に、すなわち生きることにじかに繋がっている。いのちを頂くことに直接繋がっているからです。

一日の仕事を終え、疲れた体を引きずってのこと。それでもなお、水曜夜の「学びの会」に毎週、休むことなく来られた男性がおられました。しかも、当然疲れているはずなのに、来ては牧師に質問を繰り返して、議論を吹っかけて、執拗に食い下がります。言ってみれば、いわゆる厄介な人種とも言えるのでしょうか。そんな人でした。ただ、そのようにして理屈を捏ねるかと思えば、しかしまた、思いに深く沈むような姿も見られました。その彼がバプテスマを受ける決心をされたとき、当時の御自分を振り返って言われた言葉です。「自分はそのとき、家庭のことや人生のことで格闘していました。確かな指針を求めていました。それはまた、自分の中の嫌らしさや醜さとの闘いでもありました。悍ましさと言ったらいいのでしょうか。人のことなど眼中にないほどに、それほどに、自分が扱って立つべき確かなものを探し求めていたのです。ですから、誰が他人事のようにして、好い加減に引き下がるのでしょうか。必死だったんですよ」。そして、この彼にも、イエス・キリストは生ける主として出会っていただきました。

評論家のような説明では満足しない。主イエスとの一対一の交わりを求め、心を注ぎ出してたずね求めた結果でした。男性はその後、教会の中心を担う信仰者となり、そのようにして主イエスと共なる人生を歩んでおられると聞いています。

迷いながらも揺れながらも、狼狽^{うろた}えながらも怯^{おび}えながらも、イエス・キリストの名を呼んで、主イエスのところへ赴く。悩み格闘しながらでも、そのようにして、祈りつつ、イエス・キリストと魂を通わせることなのでしょう。そのとき、生ける主イエスはすでに、この私たちと共にいてくださっているのではないのでしょうか。感情的に高ぶって昂揚^{こうよう}して感じるとか、必ずしもそういうことではないでしょう。穏やかで平静であっても、そこにはすでに、イエス・キリストが聖霊としていてくださっている。そしてその様^{さま}は、「聖書に〔すなわち、旧約聖書に〕書いてあるとおり」であると、主イエスは 38 節で教えられます。「あなたは潤された園、水の涸れない泉となる」「その魂は潤う園^{その}のようになり、再び衰えることはない」と記す、イザヤ書 (58: 11) とエレミヤ書 (31: 12) の御言葉^{みことば}です。

聖霊によって生かされるとは、ですから、人と違ってどこか華やかで劇的であるような、そのような何事か目立った在り方を求めることは必ずしも同じでないように思われます。それはまずもって、イエス・キリストと共に誠実に歩くことではないのでしょうか。そして、それはすなわち、主イエスのように歩くこと。主イエスのように、神を愛し、人を愛して歩くことだろうと思います。実際、これ以上に難しく、またこれ以上に信仰的なことがあるのでしょうか。それこそ、聖霊の助けと導きなくしてはとても起こりえないことではないのでしょうか。使徒パウロは「ガラテヤの信徒への手紙」の中で、こう語ってもあります。「霊の結ぶ^{おきて}実^みは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟^{おきて}はありません」(ガラテヤ 5: 22~23)。それらはどれも、日常のことです。日々の生活のことであり、普段の関わりのことです。そこで、主なる神を愛し畏れつつ、隣り人にもまた、心を込めて向き合う。そのようにして、そこで良きものを生み出して、創り出していくこと。聖書の信仰とは、そうした歩みを、生ける主イエスの導きと力添えとを頂いて、わずかなりとも、また少しずつでもできるようにしていただくことではないか。そう思われています。

一人のクリスチャンが祈っていました。「主よ、あなたの水は多すぎて、私には留めきれません。ですから、どうか惜しむことなく溢れさせてください」。イスラエルの塩の海である死海もそうであるように、流れ込むばかりで流れ出すことのない水場は、水が澱^{よど}み濁って、そしてついには生き物の住めない死の場所になってしまうのではないのでしょうか。貰^{もら}うばかりで、分かっことをしない。それは、私たちのエゴイズムを象徴しているのかもしれませんが。けれども、主イエスの下さる「生きた水」は、私たちの内から「川となって流れ出るようになる」といいます。イエス・キリストから頂く水が恵みのそれであり、愛のそれであるならば、また感謝のそれであり、仕えるそれであるならば、その水は自然と外に向かい、隣りの人に向かって流れ出すということなの

でしょう。そのような水が、生ける主イエスの伴いによって豊かに与えられる。「主よ、あなたの水は多すぎて、私には留めきれません。ですから、どうか惜しむことなく溢れさせてください」との祈りはきっと、そのことを意味しているのではないのでしょうか。だとしたら、残されたあと一つの間い、「生きた水」はどこに、どのように流れ出ていくのか。その答えは、主イエス御自身が言われた次のような御言葉の内に示唆されているように思われます。すなわち、「受けるよりは与える方が幸いである」との、使徒言行録 20 章 35 節のそれです。愛誦聖句に挙げる信仰者も少なくない御言葉です。

あれもこれも、実のところ、日々の現実と距離を憶えざるをえないかもしれません。実際、私たちは少なからず、そうした毎日をおくっているかもしれません。しかし、であればなおのこと、主イエスの言われる「生きた水」を頂きたい。外に流れ出るほどに豊かにそれを頂きたい、と思わされます。そして、そう祈らされています。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたは、御子イエス・キリストにおいて 私たちに語りかけ、そして 招いてくださいます。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て 飲みなさい」。魂の深い渴きを癒やされ、そこに憩いを与えられて 新たな力を得、再び日々の務めに勤しむことのできる場所を備えられて、心から感謝いたします。

どうか、日ごとに赴くべき場所を忘れることのないよう、戻るべき場所を見失うことのないよう、私たちの思いを繰り返し あなたに向けさせてください。私たちが何事かに目を奪われ、あなたから目を逸らせてしまう そのようなときにも、どうか、生ける主イエスにあつて なおも、私たちの傍らに立ち続けてくださいますように。そして、目を再び、あなたに向けさせてください。

私たちが、そのようにして、わずかなりとも 御旨に適う者としてください。神と人とを愛することによってうれしさを憶える者としてくださいますように。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン